

「ピンチをチャンスに」復興への熱い思い

佐々木 政文

(2004年 法学部卒)

2011年3月11日から4年半以上の時が過ぎ、新聞やテレビなどを通じて発信される被災地のニュースは、ほぼ無くなってしまったように感じる。だが、同時にニュースが無くなったイコール被災地が完全に復興したということではないだろう、と漠然と考えてもいた。できればこの目で被災地の現在の姿と復興の進捗状況を見たい、そして、現地に住む方の話を今こそ聞いておきたい、そんな思いに駆られつつも、日々、黙々と授業をこなすだけの毎日を送っていた。

そんな折、校友誌面で「東北応援ツアー」の存在を知り、いてもたってもいられず応募した。クジ運のめっぽう悪い自身であるが、今回、幸運なことに参加を許され、実際に被災地を訪問するチャンスを得ることができた。

初日は仙台駅からバスに乗り、まず女川町に向かった。復興まちづくり情報交流館では、震災前と震災直後の写真が比較して展示されており、震災の爪痕を目の当たりにした。あまりもの惨状に、胸が締め付けられる思いであった。だが、これからの女川町のまちづくりについて、職員の方の説明と立体模型で理解を深めることができ、壊滅的な打撃を受けながらも、前向きに新しいまちへと変貌をとげようと尽力している人々の思いを感じとり、希望を感じながら施設を出ることになった。

実際に、JR女川駅は木材を基調とした新駅舎で再開し、駅舎に併設された温泉施設は観光客や地元の方の憩いの場となっている。震災に打ちひしがれ、何もできなくなってしまうのではなく、震災をピンチではなくチャンスとして、よりよいまちへと変わっていかうとする人々のパワーに、自身も胸の熱くなる思いであった。

石巻では、車内で地元の方の被災時のお話をお伺いしながら、今年新設された世界最大級の魚市場を見学することができた。ただ規模が大きいというだけでなく、水揚げや荷捌きが以前より効率的に行えるようにエリアが分かれていることや、カモメやウミネコから水揚げした魚を守るために、電動の大型シャッターが隙間なく設置されるなど、随所に工夫をこらした最新の施設に生まれ変わっていた。これも、震災をピンチではなくレベルアップするチャンスととらえ、実際にかたちにした好例といえるだろう。

その後、ホテルにおいて、名取市内で笹かまぼこの製造・販売をされている「さき圭」の佐々木圭亮社長と靖子夫人のお話をお伺いすることができた。被災時の状況だけでなく、その後の営業再開までの思いや苦労されたことを知ることができ、非常に興味深かった。

特に印象に残っているのが、レシピが全て津波で流されてしまったため、以前の味を再現するため、試作を繰り返しているときに、以前の味の再現だけにとどまることなく、新しい製品にもチャレンジしようという思いがふつふつと湧いてきたというエピソードである。

ここにも、震災をピンチではなくチャンスととらえる、熱い思いを感じることができ、復興はまだ道半ばながらも、着実に進んでいるという確信を持った。佐々木夫妻をはじめとした、被災地の方々の誠実なお人柄と、地域の復興に尽力するその姿勢に、自身の方が励まされ、背中を押される思いであった。

二日目は、船で松島港から塩釜に渡り、そこからバスで閑上地区に向かった。日和山に登り、慰霊碑にお参りすることで、津波に飲まれ犠牲となった多くの人々の無念を背負って、我々の世代がこれからの社会をよりよいものにしていかなければいけない、という思いを強くした。同時に、防災について日ごろから常に意識し行動すること、そして、自身が被災地で目にしたものや感じたことを、授業を通じて次世代を担う子供たちに伝えていくことが、自身に与えられた役割であると感じた。なかなか上手に伝えることが現状ではできていないが、少しでも興味を持って、自分で調べたり、現地を訪れたりする子供たちが出てくることを期待している。もちろん、自身も今後の被災地に注目している。今後は、機会を見つけてプライベートで訪れるつもりだ。

最後になってしまったが、この素晴らしい東北応援ツアーを企画してくれた校友会スタッフの皆様方、心あたたまるおもてなしで迎えてくださった佐々木夫妻をはじめとする宮城県校友会の方々、そして、自身に復興と被災地のこれからについて様々な示唆や考えるヒントを下さった今ツアーの参加メンバーの方々にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

本当にありがとう。言葉だけではなく、心から。